

T P I 研究 (Ⅱ)

— 学生相談のためのスクリーニング・テスト —

藤 本 幸次郎

Research for TPI (Ⅱ)

Screening Test for Student Counseling

Kohjiro FUJIMOTO

An investigation has been conducted for the purpose of using TPI as a screening test for student counseling.

A norm list was prepared in order to classify an individual student or a group of students into four categories, i.e., problem range, border range, semi-normal range, and normal range by using their standard scores at every scale in TPI. Then, the norm list for judgement was applied to a verification of a group of students in the first year at university, and the results were examined. The students judged as of the problem range are considered to be very likely to have behavior-character disorders and be in need of special assistances including a clinical interview and a counseling.

The survey draws the conclusion that TPI is an effective test as to find maladjusted ones out of a great number of students and also very useful for student counseling activities.

問 題

大学の学生相談所に寄せられる相談の種類は、だいたい、学業、進路、経済、学生生活、適応の問題に関するものである。

ある大学の学生相談統計¹⁾を見ると、最近では相談所を利用する学生が増加し、相談の内容は学業に関する相談が減少しているのに比べて、転部・転科の相談や進路に関するものが徐々に増え、対人関係や心理障害の相談が飛躍的に増加している。他のどの大学もほぼ同じ傾向にあるようである。つまりさまざまな問題をもって自発的に来談する学生のうち、適応障害に悩む学生の割合が高くなってきているということである。

そこで問題なのは、まず適応障害の学生は自分の問題を自覚しないでいる場合があり、したがってカウンセリングへのモチベーションが低く、無為に過ごしている場合が少なくないということである。つぎに来談者数が増加したといっても学生総数のうち、わずか4～5%ばかりの学生しか利用していない²⁾という事実である。このような実態を見ると相談統計に現われた数字以上

に数多くの適応障害の学生が潜在している可能性があると考えられる。

学生相談は、学生が個性を十分に発揮して、日常生活のあらゆる問題や場面によりよく適応し、有意義な大学生活を送るように援助する、ガイダンス活動の中軸をなすものである。それゆえ相談関係者は、大勢の学生の中から適応障害に悩む学生をひとりでも多く、わずかな時間で的確に、発見する方法を考え出し、そしてそれによって発見した学生に対して、臨床的面接等の専門的な援助を行うように努力することがなによりも大切であると考ええる。

以上のことから本研究では、学生相談のために T P I ^{3)・4)} を、多数の学生の中から行動・性格の障害 ⁵⁾ を有する可能性の高い者を発見する、所謂スクリーニング・テスト ^{6)・7)} として利用することについて検討することにした。

T P I 判定基準表の作成

T P I の結果の解釈は、通常、(1)有効性尺度の結果によって回答がどの程度信頼できるか、また、結果をどのように解釈したらよいかを判定する。(2) D p 尺度から I n 尺度まで、個々の尺度の結果を、尺度ごとに解釈する。(3) プロフィールからコード型を求め、これをコード型の資料と対照させて解釈する、という 4 つの段階を踏んで行われる。

ここでは T P I をスクリーニング・テストとして利用することを目的としているので、基本的には第 2 段階の解釈法を採用した。そこで基本尺度（尺度 1 ～ 9 の 9 種類）の標準得点を基本にし、それに有効性尺度（尺度 A ～ E の 5 種類）の標準得点を加味した判定基準表を作成した（表 1）。

この基準表によって、大学生の個人または集団のパーソナリティを概観的に判定分類することにした。

なお、付加尺度の I n については、別途、表 2 の社会的向性（尺度 I n ）評価表によって社会的内向的傾向－社会的外向的傾向を評価するようにした。

表 1 T P I 判定基準表

判 定 区 分 \ 尺 度		基 本 尺 度 (1 ～ 9)	有 効 性 尺 度 (A ～ E)
問 題 範 囲		標準得点(T) 70 以上の尺度が一つ以上	_____
境 界 範 囲		標準得点(T) 60 ～ 69 の尺度が一つ以上	標準得点(T) 70 以上の尺度が一つ以上
準 正 常 範 囲	++	標準得点(T) 60 ～ 69 の尺度が一つ以上	全部の尺度が標準得点(T) 69 以下
		標準得点(T) 55 ～ 59 の尺度が一つ以上	標準得点(T) 70 以上の尺度が一つ以上
	+	標準得点(T) 55 ～ 59 の尺度が一つ以上	全部の尺度が標準得点(T) 69 以下
		全部の尺度が標準得点(T) 54 以下	標準得点(T) 70 以上の尺度が一つ以上
正 常 範 囲		全部の尺度が標準得点(T) 54 以下 但し、ほとんどの尺度が標準得点(T) 44 以下 の場合は正常範囲沈下型として区分して もよい。	全部の尺度が標準得点(T) 69 以下

表 2 社会的向性（尺度 In）評価表

評 語	標 準 得 点 (T)
非 常 に 内 向 的	65 以上
や や 内 向 的	55 ～ 64
普 通	45 ～ 54
や や 外 向 的	35 ～ 44
非 常 に 外 向 的	34 以下

大 学 生 集 団 の T P I 結 果

T P I がスクリーニング・テストとして役に立つかどうかを検討する資料を得るために、大学生に T P I を実施した。

被験者は、大学 1 年生の男子 163 名、平均年齢は 18.3 歳であった。実施時期は、平成 2 年 7 月 5 日から 7 月 15 日にかけて実施した。実施手続きは、T P I 標準版を集団法で実施した。検査の教示において、回答するときあまり考えすぎないこと、なるべく「はい」か「いいえ」のどちらかに決めて回答すること、無回答が全体の 1 割以上にならないようにすることを強調した。

結果の整理では、無回答数が 1 割以上あった 8 名を除き、155 名を統計の対象にした。

その結果、表 3、図 1、表 4 および表 5 のとおりの成績を得た。

表 3 T P I 尺度別の平均値と標準偏差（155 名）

尺 度	Nr	Rr	Uf	Li	Cr	Dp	Hc	Hy	Ob	Pa	Hb	As	Ep	Ma	In
平 均	2.9	2.6	7.6	5.2	8.1	12.7	12.9	7.2	23.4	12.7	13.4	14.8	5.8	8.9	17.7
標 準 偏 差	—	2.24	5.01	2.89	3.07	2.25	3.54	3.50	4.09	2.89	3.60	3.12	3.63	3.72	7.92

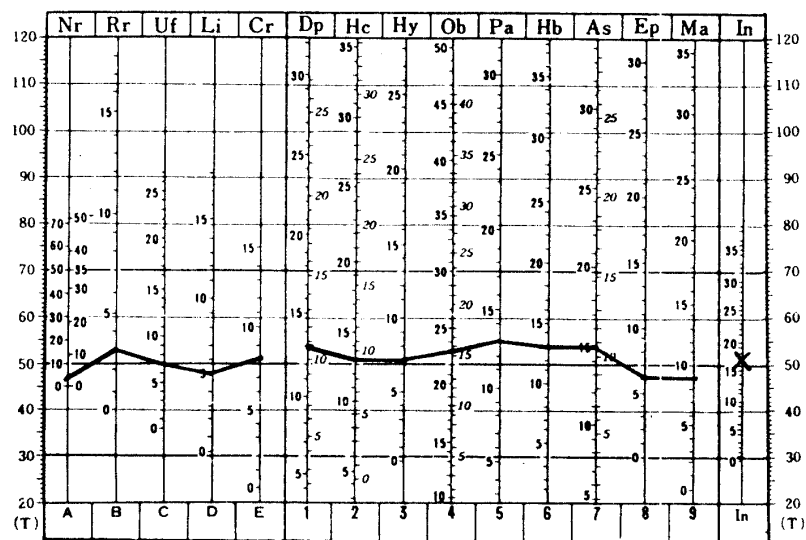


図 1 T P I 平均プロフィール（155 名）

表 4 T P I 判定区分別の人員と割合 (%)

判 定 区 分		人 員	%
問 題 範 囲		33	21.3
境 界 範 囲		11	7.1
準正常範囲	++	64	41.3
	+	29	18.7
正 常 範 囲		18	11.6
計		155	100.0

表 5 社会的向性評価段階別の人員と割合 (%)

評 語	人 員	%
非 常 に 内 向 的	20	12.9
や や 内 向 的	41	26.5
普 通	58	37.4
や や 外 向 的	32	20.6
非 常 に 外 向 的	4	2.6
計	155	100.0

全 体 的 考 察

(1) 判定基準表を作成するときに、基本尺度のすべての尺度が標準得点69以下の場合、有効性尺度の標準得点を加味して判定するようにした理由は、第一に有効性尺度の得点にはなんらかのパーソナリティ特性や精神状態が反映されていると考えたからである。第二には今日までの臨床経験で、有効性尺度は行動・性格の障害者と正常者とを識別するのにかなりの力があるという知見を得たからである。

(2) 判定区分は問題範囲、境界範囲、準正常範囲および正常範囲の4つであるが、スクリーニング・テストの立場では、問題範囲がトリートメントの対象になる。もちろん場合によっては境界範囲もその対象にしてもよい。

問題範囲は、基本尺度で標準得点70以上の尺度が一つ以上ある場合である。標準得点70以上の者は、正常成人の集団では2.5%しか出現しないはずである。したがって問題範囲と判定された者は、正常成人の平均値から大きく逸脱しており、行動・性格の障害を有する可能性が高いと見なされる。この問題範囲のもつ意味は、筆者が相談機関でT P Iを実施した相談事例について分析した結果に照らしても、妥当であると考ええる。その一部を紹介すると、受理面接で性格面に問題が有りそうだと判断された事例のうち、約70%の者は問題範囲であった。また臨床面接と事例史調査の結果、精神医学的意見を聞いた方がよいと思われた事例のうち、約60%はやはり問題範囲で、そのほとんどの者が神経症、分裂病等の精神障害を有すると診断されたのである。

(3) そこで大学1年生集団の判定結果を見てみると、問題範囲の出現率は21.3%である。この出現率は大学の間に、また学部間で差異があると思われるが、筆者はだいたい17~23%の出現率であろうと推測している。

そこで問題範囲と判定された個々の学生の結果を、コード型⁸⁾やプロフィールの型⁹⁾によって、解釈したところ神経症傾向の者が51%と最も多く、次いで内閉性傾向の者24%、性格の偏りが目立つ者と反社会的行動傾向の者とが12%、その他の者であった。

境界範囲については、行動・性格の障害が有るのかどうかははっきりしないが、概ね軽度の障害を有する可能性がある。

(4) T P I (問題範囲) は、学生相談関係者が指摘しているところの自殺、無気力反応、対人恐怖、留年・中途退学等の青年期特有の適応障害の原因になっていると考えられる行動・性格の障害をよくとらえているように思われる。

(5) 以上のことから、問題範囲と判定された少数の学生には専門家の援助が必要である。学生相談所の方から当該学生に接近して相談の機会を積極的につくり出すとか、あるいは呼び出し相談の方法で、臨床的面接を行ない、それにもとづいて徹底的なカウンセリング等の援助を行うことが大切である。

なお、時間的に余裕があれば境界範囲の学生も相談の対象にした方がよい。また I n 尺度の社会的向性評価で「非常に内向的」または「非常に外向的」と評価された学生（問題範囲や境界範囲と重複していることが多いので、その人員はわずかであろう。）についても同様の援助を行うことが望ましい。

要 約

T P I を学生相談のためのスクリーニング・テストとして利用することについて検討した。

T P I の尺度ごとの標準得点を利用して、個人または集団を問題範囲、境界範囲、準正常範囲および正常範囲に判定分類する基準表を作成した。そしてその判定基準表を大学 1 年生の集団に適用して考察した。特に問題範囲と判定された個々の学生のプロフィールを解釈した。その結果、問題範囲はさまざまな適応障害の原因になっていると考えられる行動・性格の障害をよくとらえていることがわかった。

問題範囲と判定された学生は行動・性格の障害を有する可能性が高いと見なされるので、その学生を相談の対象として臨床的面接やカウンセリング等の専門的な援助を行う必要がある。

T P I は大ぜいの学生の中から適応障害の学生を発見するのに便利なテストであり、学生相談活動に役立つものである。

参 考 文 献

- 1) 平木 典子 1990 学生相談室で行うカウンセリング 細木照敏・平木典子編 学生カウンセリング 同文書院 PP. 3—9.
- 2) 細木 照敏 1990 青年期の課題とカウンセリング 細木照敏・平木典子編 学生カウンセリング 同文書院 PP. 273—274.
- 3) 肥田野 直 1967 T P I テストの内容と実施について 学校保健研究、9 巻 1 号、PP. 2—7.
- 4) 肥田野 直 (代表者) 1970 T P I 実施手引 T P I 研究会
- 5) 原野広太郎 1989 問題行動の捉え方 原野広太郎責任編集 性格心理学新講座 5 金子書房 PP. 3—14.
- 6) Anastasi, A. 1988 Technical and Methodological Principles Psychological Testing (Sixth ed.) PP. 71—234. New York: Macmillan.

- 7) R. B. キャッテル 斎藤耕二・安塚俊行・米田弘枝共訳 1981 パーソナリティ・テストと学童 パーソナリティの心理学〈改訂版〉 金子書房
PP. 293-332.
- 8) 藤本幸次郎 1977 T P I (東大版総合性格検査) 研究 (I) -プロフィール型及びコード型について- 日本心理学会第41回大会発表論文集、PP. 1248-1249.
- 9) 藤本幸次郎 1990 T P I 研究 (I) -プロフィールの型について- 福井工業大学研究紀要 第20号 (第二部) PP. 99-106.

(平成2年12月19日 受理)